

## R・ボーレンの「説教学」について

池田豊人

### 一

ルードルフ・ボーレン教授の「説教学」が、加藤常昭氏によって和訳出版されたのは、一九七八年の年末であった。

ドイツに留学されたことのある平田祖英老師から、布教学の研究にはキリスト教の説教学を大いに参考にすべきではないかという教示を予ねて受けて、C. H. DODOの著書 THE APOSTOLIC PREACHING を垣間見たことはあったが、仲々に理解し得ない時にこの本が出たので、早速にもとめて研究の対象にしている。

### 二

著者は、ハイデルベルク大学の神学教授で、現代ドイツの実践神学会を代表する学者である。

一九二〇年、スイスはアルプス山麓の町、グリーンデルヴァルトに生れている。バーゼルおよびベルンの大学で神学を学

んでいるが、カール・バルトがボンからバーゼルに移って間もなくの頃で、バルトやトゥルナイゼンから強い感化を受けていると思われる。

一九四五年に牧師になり、ベルンやホルダーバンクなどで牧会をし、その間にオスカー・クルマンのもとで新約学の学位を得ている。そして、ヴッパタータル神学大学、ベルリン神学大学を経て、ハイデルベルク大学に移っている。所謂、キリスト教における「神学教授」であると共に、現代ドイツの有数の説教者である。

加藤氏は「やはりバルト神学の系譜を受け継ぐ、改革派の神学者です。ルター派ではないのです」と紹介している。

### 三

そのボーレンの「説教学」は、日本基督教団出版局の発行になるもので、IとIIの二巻からなり、千頁におよぶ大冊である。因みに訳者の加藤常昭氏は、東京神学大学教授である

と共に、日本基督教団鎌倉雪の下教会の牧師である。

書名はドイツ語で PREDIGTLEHRE になっており、英語では PREACHING にあたらう。SERMON ではないところにも一つの意味が感じられる。

その全体は、「説教の諸問題」あるいは「布教の諸問題」とでもいえるようなもので、説教に関するさまざまな問題がそこに取り上げられている。その一章一章は独立して読めるようになっていて、訳者の加藤氏等との厳しく激しい討論の上ででき上っている。そして、各章各節に参考文献、参考資料が詳細につけられていて、極めて学問的なものである。

キリスト教における「説教」は、長い歴史をもち、深い研究がなされているが、また大変に広範多岐にわたっているようである。日本の神学教育において、主に用いられてきた説教は、英米流のそれであったようで、ドイツの説教が導入されたことは、殆んどなかったらしい。加藤氏はアングロサクソン系の説教との折衝を試みようとして、文献表まで作られたらしいが、容易なことではなかったようである。

ボーレンの「説教」が、キリスト教の中において、どのような位置を占めるかについてはこれからの研究である。ただ、ボーレンの論文には、強烈な自己主張がみられるが、却つてそこにある共感を覚えさせるものがあるのである。また、加藤氏のいう「実践神学の中でも、最も古い歴史を持つ

説教の伝統の中に身を置いて、それを継承しつつ、また批判的に乗り越えようとしている姿勢」も肯定できるようである。従つて、この本の体系をみると、強い独自性がみられるが、その独自性が尊重されるべきものであるということができよう。

従来の仏教の「布教」においては、キリスト教の「説教学」のような深さと体系をもつたものはいみじくない。しかし、幾つかの禅宗関係の布教概論の中に、明らかにキリスト教の説教の影響と思われるものがあつた。それらがどのような資料に基いたものであつたかの考究も一つの課題である。

#### 四

仏教における「説教」と、キリスト教における「説教」とは、文字は同様でも幾つかの基本的な相違がある。神と人をつなぐ宗教としてのキリスト教と、仏の教えを信じ、仏となる宗教である仏教とであるから当然のことである。キリスト教の説教は、殆んど教会の一部として行なわれるようであり、聖書と福音書からとられた一定のことばが年間を通してカリキュラムになつていようである。教会に当つての牧師は、前夜において定められたことばを読み、聖霊を受け、翌日、神のことばと共に聖霊を伝えることが主となつて、あと

に教訓がなされ、それが全体として「説教」となるのが通常のものである。勿論、随時随処の説教が行なわれるのであるが、ポーレンは通常の牧会のために二日二晩の準備のための時間が自分には絶対に必要であると述べている。

仏教における説教は、口舌布教の中心をなす、第一の布教手段である。もちろん本来は、時、処、人に応じて自由な説教が行なわれたのであろう。やがて、廬山の慧遠あたりから、法要の一環としての威儀儀式を伴う説法形式となり、遂には説教のための説教になってしまっている現実もみられる。

説教は、各宗とも一定の形式をもち、威儀を具足し、化導と唱導を兼ね、原則として「説教の五段法」をとる。仏陀の代説として、大慈悲に住し一切衆生を救済しようとする大願を、身業、口業、意業の説法にこめるのが「説教」である。

## 五

その説教を、いつ、どこで、だが、どのようにして、歪めてしまったのであろうか。仏教とキリスト教において、それぞれ事情は違つても、ポーレンのいう「困惑」は相い通じるものがある。

説教と説教者（布教師・牧師）と寺院（教会）、教団と布教師と寺院、これらの関係が「説教」において困惑の状態にあ

る。ポーレンは、神学教授と牧師と教会のありよう等の困惑をいろいろと取り上げている。

仏教における、特に禅における「信」と「証」の問題は、正しく理解され、組織の上に具現されているのか。教団の中において布教師はどうなっているのか。組織づけはなされているにしても、そこにある「困惑」は一顧だにされず放置されてはいないか。ただ「人」の問題に転嫁されてはいないか。ポーレンがキリスト教における問題として取り上げている事柄が、翻つて仏教の中でも問い直されなければならぬ。

「説教」と云い、「説教すること」と云い、「説教師」と云つて、云う人はどのように考え、云われる人はどのように思うのであろうか。「説教をし」「説教を論じる人は、宗教において大した人ではないとするのは何故なのか。

「説教」とは一体なんなのであろうか。ポーレンはそれを定義しない。「わたしは、自分自身で説教の定義をなすことを拒否したい。説教の定義は、今日さまざま理由で不可能だと考えるからである」としている。

問題はそんなところにはない。仏法への情熱である。僧侶としての情熱である。ひとりひとりが情熱的な説教者でなければならぬのではないか。

## 六

ボーレンの「説教学」は、自分は情熱的な説教者であると考えていることから始まっている。

「わたしは情熱をこめて、好んですることが四つある。絵をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、そして説教である」。ボーレンは、説教と並ぶ三つの情熱のわざに打こんでいる。大いに共感するところである。三つの情熱のわざは、われわれにとつては「作務」であると受けとめることができよう。常に堂舎の塵を払い、日天の掃除をし、経を誦む、作務に打ちこんだ無心の境を通ってきたことばでないとならば、説教にはならない。毎日の日天掃除はそのまま洗心である。またとない「散悶」である。

ボーレンは云う「説教者というのは、原則的に云って、先立って働く者 Vor-Arbeiter なのである」と。

## 七

Ⅱにおさめられている第五部の「聞き手」は特に注目される。

「説教の聞き手は、説教にとつて、どのような役割を果すものなのであろうか。この問題を、エドゥアルト・トゥルナイゼンおよびヒルンスト・ランゲと討論しつつ論じてみたい。聴衆は説教

が向けられる相手である。しかし、決して唯一の相手でもないし、また最初の相手でもない。どのような説明にもあてはまるのは、その言葉は神の耳に聞かれるということである。聞き手からの自由が、テキストに第一の発言権を与える。聴衆のための自由が、聞き手に発言権を与える」

と前置きして、聴衆を問う問い、聴衆からの自由の中にある説教、聴衆から挑戦される説教、第一の聞き手と第二のテキスト、というユニークなタイトルをつけて、第五部の最初の章の各節を論じている。

最も現代的なことばの科学における聴衆の分析もここまでは届かない。流石に長い伝統をもった説教をふまえての成果であらう。

次章の「聴衆への道」も深い示唆に富んでいる。ボーレンはその「説教学」の最後を次のような文章で結んでいる。

「成熟すること、そこにこそ説教者の自由が生じるであらう——そしてまた、情熱的に喜んで説教する自由も！」

(花園大学禅文化研究所員)